

教育と発達におけるコミュニケーションの役割

The role of communication in human development and education

高取憲一郎 TAKATORI Kenichiro

(教授・発達科学講座)

キーワード：コミュニケーション communication, ヴィゴツキーVygotsky, ピアジェ Piaget, チャプマン Chapman, 心の社会的基盤 Social bases of mind

1) はじめに

2009年2月1日にNHK教育テレビで放映された、「ETV特集『作家・辺見庸 しのびよる破局の中で』」は、辺見庸という作家の一言ひとことの噛みしめるような言葉の中に深いメッセージがこめられていて、最近の番組の中では出色のドキュメンタリーであった。

辺見は、その中でまず冒頭に、2008年6月4日に秋葉原で起こった自動車工場働く非正規派遣社員がレンタカーで歩行者天国へ突っ込み、7人が死亡、10人が重軽傷を負った事件（いわゆる秋葉原事件）をとりあげた。彼は、この事件を経済恐慌にとどまらぬ、もっと大きな恐慌、それは心的恐慌とでもいふべきものの前触れととらえている。別の角度から見れば、それは、この間の構造改革の中で現れてきた、金儲け至上主義、負け組みは個人の責任であるという風潮の蔓延、派遣労働者を冷酷非情に簡単にくびにして路上に放り出すというような労働者をモノとしてしか見ない経営者の姿勢、等々の人間の倫理や価値の喪失とでも呼びうるようなモラルの危機でもある。彼の言葉を借りれば、資本の関わる原発悪があちこちに転移してヒトの心の中に広がり、手に負えない状態になっている。これを、新型インフルエンザなどが感染する様に模してパンデミック（感染爆発）な状況と呼んでいる。現代日本において、人間が生きていく意味というようなモラルの根源の部分が喪失してきていることを辺見は鋭く指摘したのだ。

さらに、彼は、このような状況をカミュの小説『ペスト』（1947年）を引用しながら警告を発している。小説『ペスト』は、アルジェリアのオランという町で、ペストが10ヶ月にわたって蔓延していった様子を描いたものである。最初は、ネズミの死骸が町のあちこちで発見されるという小さな異変から始まった。マスコミの過小評価と人々の誤った楽天主義のために、ペストとは気づかず見過ごされた。これが結果的には手遅れを生む。ネズミの次に、今度は人間が大量に死んでいくことになった。現代の日本はまさにこの状況であり、将来に悪いことが起きるかもしれないのではなく、もうすでに今起きている。テレビでは年越し派遣村の様子や、派遣労働者や非正規労働者の解雇を連日のように報道する一方で、同じテレビが大食い競争やグルメ番組をやっている。いわば、マスコミが社会の現実を国民の目から覆い隠す役割を果たしている。このように、現代日本は正気と狂気とが重層してい

る社会である。これが、現代日本に存在する「無意識の荒み^{すき}」の発生源となっている、と辺見は主張する。

秋葉原事件は、このようなすさまじい社会に生きざるを得ない人間の発作のような生体反応であり、現代社会が人間に合わないということを示している。人間には、金儲けとは異なる迂遠な時間と空間が必要である。しかし現状は、誠実さとか優しさ、愛などの人間的モラルさえも資本に奪奪されてしまっている。それゆえに、資本に対する闘いを抜きにしては人間の回復は見込めない。

以上の辺見の主張は、きわめて説得的で共感を禁じえない。ここには、日本という国が崩壊していく中で、人と人とのつながり、絆が失われていき、まさに地域崩壊、人間関係の崩壊という現象が日本の深層の部分で着実に進行していることが予感されるからである。そこには、マスコミが最近とみに取り上げ始めた、引き取り手のない孤独死の遺体が年々増加して、ここ最近はかなりの数にのぼっているという「無縁社会」との関連も見出されるのである。それらは、別の視点から見れば、わが国におけるコミュニケーションの崩壊現象でもある。

以下のところでは、このような問題意識をヴィゴツキー派心理学との関連ではどのように考えたらいいかを論じてみたい。

2) 現代日本では、コミュニケーションはどのように取り上げられているのか

近年、人間の問題とコミュニケーションとの関連がますます注目されているように思われる。この間、私が気づいている範囲という限定ではあるがいくつかの例を提示してみよう。

(1) PISA（国際学力調査）におけるフィンランドの躍進に関連して：PISAにおけるフィンランドの高い評価に関しては、さまざまに検討されてきていて、その要因についてもほぼ論じつくされてきたように思われる。しかし、コミュニケーションとのかかわりでは、あまり論じられてこなかったように思われる。ここでは特にコミュニケーション力について言及している北川達夫の主張に注目しておきたい^①。北川は、フィンランドの高学力の理由として問題解決力、とりわけ、集団での問題解決力をあげている。このときに、重要となるのがコミュニケーション力であると指摘している。

(2) テレビで放映された番組から：コミュニケーションとの関連で見たときに、ここ5年間ほどの間に放映された番組の中で、私は、以下の二つのものに特に注目してきた。

ひとつは、NHKのクローズアップ現代「キレる子防ぐ最新脳科学」(2006年5月10日)である。この番組は、冒頭で、近年、教育問題を脳科学との関連で検討する必要性を文部科学省も認識し、委員会を立ち上げたことを紹介した後に、特に子どもの「キレる」という現象をとりあげている。ここでは、「キレる」というのは、喜怒哀楽の感情を適切にコントロールできないことであるとして、感情の健全な発生と、適度な抑制を図るにはどうしたらよいかという点を検討している。その際、近年の脳科学の研究成果により、感情の発生には大脳辺縁系の扁桃体が、また感情の抑制には前頭前野が関係していることがわかってきた。この二つが健全に成長するためには、身近な人たち(親、友達、先生など)との親密なコミュニケーションが必要であることを強調している。コメンテーターとして登場した脳科学者の小泉英明氏は、番組の中で紹介された保育園での「じゃれつき遊び」の実践とか、少年院での「人間関係を作る教育プログラム」などは、脳科学から見てもきわめて科学的に意味のある取り組みであるとコメントしている。

これとの関連で、ブラザースの見解もここで取り上げておきたい。ブラザースは、その著書の中で、人間の脳は進化の産物として、社会的な脳となっており、脳のある部位(大脳辺縁系および扁桃核)がその生得的な社会性を司っていること、そしてその社会性は他者とのコミュニケーションの過程により開発され、人間の心として展開していくことを主張している^②。

二つ目のものは、NHKスペシャル「赤ちゃん 成長の不思議な道り」(2006年10月22日)である。このドキュメントは、ヒトの赤ちゃんに生後すぐに備わっていた優れた能力が、成長とともに失われていき、その一方で不要なものを切り捨てていき、必要なものだけを残していくように統合が行われていく様子を描いている。その中には、コミュニケーションと発達のかかわりという視点から見ても興味深い事例が紹介されている。中国語の音声の識別力の学習は、ビデオを見させることによる間接的な学習によつては効果がないが、中国人との直接対面条件における学習では効果があったこと。また、ハイハイができなかった赤ちゃんが、同年齢の子どもたちと集団で一緒に遊ぶことによって刺激を受け、その後まもなくできるようになったこと。これらのことは、人との社会的なかかわりが学習にはきわめて重要であること、人との

かかわりの中で学ぶことは強い力を持っていることを示している。

3) ヴィゴツキー派のコミュニケーション論

ところで、これまで述べてきたコミュニケーションに関する議論については、ヴィゴツキーのコミュニケーション論から見直すと理解がより深まると思われる点もある。ヴィゴツキーのコミュニケーション論としては、心理間機能から心理内機能への内化、および最近接発達領域という概念が重要である。

心理間機能と心理内機能とは、個人間に分かちもたれた機能と個人内機能、あるいは、心理の社会的平面と個人的平面とも言われているものであるが、ヴィゴツキーは次のように説明する。母と子どもがいる場面で、二人の前に茶碗がある。母が子どもにあれは茶碗だよと言って、茶碗を指さす。子どもは母のその言葉にうながされて茶碗のほうを見る(茶碗に注意を向ける)。ところが、こういうことを何回か繰り返すうちに、子どもは自分自身であれば茶碗だよと言いながら自分だけの力で茶碗を見るようになる。このように、最初は母と子どもとの間の協力関係で営まれていた(母と子どもの間に分かちもたれていた)茶碗を見るという行為が、その後では子どもの内部にあたかも母が入り込んできたかのごとくに、子どもの内部だけの機能として営まれるようになる。これを、心理間機能が心理内機能へと内化したという。

また、最近接発達領域とは、「独力でなしうる問題解決の水準と、大人の指導あるいは自分よりも能力のある友だちとの協力によってなしうる問題解決の水準との間の距離」であるとされており、この領域に対して教育的な働きかけがなされねばならないと主張されているのであるが、よく考えてみると、このメカニズムは母と子の例を持ち出して説明されている心理間機能から心理内機能への内化ということと実は同じことを述べている。重要な点は、最近接発達領域という概念にも、心理間機能から心理内機能への内化という概念にも、すでにコミュニケーションという側面が含まれている、あるいはコミュニケーションが前提条件とされているということである。

この点で、チャプマンの「認識の三項関係モデル」^③はヴィゴツキーのコミュニケーション論、とくに心理間機能から心理内機能への内化というメカニズムをさらに発展させたものと考えられる。彼の言う「認識の三項関係モデル」とは、図1に示されるようなものである。

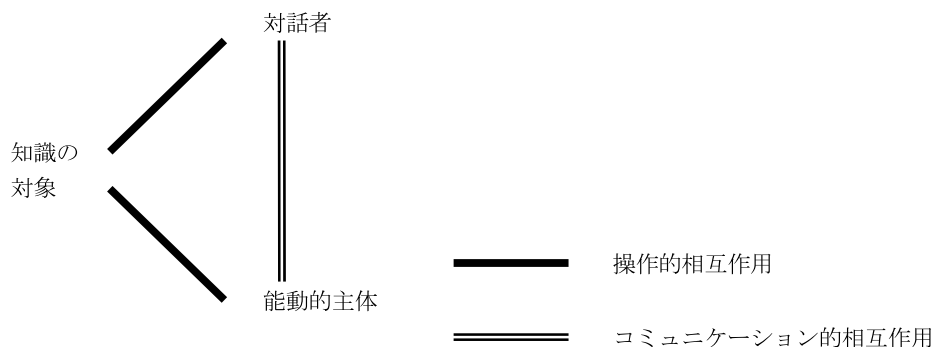


図1 チャプマンの認識の三項関係モデル

チャップマンはこの三項関係図式がピアジェの知能の発達段階区分で言えば、前操作期から具体的操作期にかけての移行期、すなわち七、八歳頃に全体としてまるごと子どもの中に内化されるとするものである。

そして、このときの内化のメカニズムをヴィゴツキー派のガリペリンの知的行為の多段階形成理論に求めている。それは、知的行為は以下のような5段階で形成されるとするモデルである。

①準備的段階（定位的基礎の形成）②外的、対象的行為の形成の段階 ③外言の段階 ④つぶやき（外言から内言への移行）の段階 ⑤内言（内的行為）の段階である。要するに、初めに外的な身体的行為として形成されたものが、外言→つぶやき→内言という順序で内的行為（意識）として段階的に形成されていくというモデルである。

チャプマンによれば、ガリペリンのモデルで一番大事なところは、段階②から段階③へと移るところである。すなわち、段階②までの外的行為が言語の平面へと移されることにより、段階②の身体的行為を遂行する中で作り出されたイメージと言語が結びつけられる。そのために、イメージが学習者の頭の中に固定されるからである。

また、このとき重要なことは、学習者が自分の目の前にいる他人にも聞こえる形で（すなわち外言の形で）判断基準であるとか自分の考えなどを述べることであるが、その際には他人にもよくわかる形で正確に表現することが求められる。このように、他人とのコミュニケーションという社会的圧力の下で、学習者は対象のイメージと言語とを結びつけることにより、その後の段階④、段階⑤で形成されていく学習者個人の意識の中に社会性が導入されることになる。

ヴィゴツキーのコミュニケーション論は、ここまでに触れたすべての事例を説明するものではないが、心が社会によって、とりわけコミュニケーションによってつくられるというメカニズムの研究のための依拠すべき出発点を示しているように思われる^④。

4) 社会が心をつくる仕組み

ルリヤは、彼の遺稿である「社会科学と生物学との間の心理学の位置」（1977、『哲学の諸問題』誌、ロシア語）の中で、社会と脳と心の関係を簡潔に説明している。

「バジル大聖堂は、重力抵抗の法則を無視しては立っていることはできない。しかし、バジル大聖堂のオリジナリティーをすべて、重力抵抗の物質的法則に帰してしまい、その建築の社会・文化的伝統の中における様式のオリジナリティーを無視するというところは袋小路にはまってしまう。」（この引用文は、Davydov,2005^⑤による）

このルリヤの主張は、心は脳の働きを無視しては成り立たないが、それを踏まえた上でもさらに社会との共同作業として、ただし社会の主導のもとに形成されるということである。この関係を表すもっとも単純なものとして、すでに3)で触れた母と子の間のコミュニケーションによる意識の形成というモデルが想定されていると思われるのであるが、この母と子のコミュニケーション場面を、ヴォケイト (Vocate,1987)^⑥は、次のように説明している。子供と大人との相互作用は言語活動により行われるが、そのときに、言語の中に社会と文化の資源が仕込まれているために、心は社会的文化的起源をもつことを保証される。また、言語活動は、脳という生理学的基盤を維持したまま、人間の機能を生理学的水準から高次心理過程の水準へと移行させるメカニズムであり、その際、とくに内言の役割が重要である。かくして、人間の心は、脳という物質に基礎を置きながら、言語活動というシンボルシステムによって媒介され、社会的に形成されていく。このようにルリヤは考えていたのだとヴォケイトは述べている。

5) 心の社会的基盤を求めて

ところで、コミュニケーションに光を当てながら、心が社会により作られるというテーマを追求してきたわけであるが、この論点をさらに深めるために、少し訓話学的な趣もしいではないが、以下のような言語学的考察を取り上げておきたい。それは、マルクスの「フォイエルバッハに関するテーゼ六」に関する興味深い指摘である。

マルクスの「フォイエルバッハに関するテーゼ 六」の「人間的な本質は個々の個人に内在する抽象物ではない。それは、その現実においては、社会的な諸関係の ^{アンサンブル} 総和である。」^⑦という文章は有名であるが、私自身について言えば、これまでごく一般的にしか理解してこなかった。ところが、この部分の説明として目から鱗が落ちる思いをさせられたのは、内田義彦の『社会認識の歩み』^⑧の中のある指摘であった。もっとも、内田も他人の説を紹介していて、内田のオリジナルではない。その他人とは、国民文庫版のマルクスの『経済学・哲学手稿』^⑨の巻末の〔付録1〕「英訳モスクワ版の用語についてのノートから」所載の、モスクワ版の英訳者、イギリスのマーティン・ミリガンであり、彼の翻訳者ノートの中の一節である。

この中で、ミリガンは、上述の「人間的な本質は個々の個人に内在する抽象物ではない。それは、その現実においては、社会的な諸関係の ^{アンサンブル} 総和である。」というところの、従来からしばしば人間的な本質あるいは人間的な存在と訳されている部分、すなわちドイツ語では「das menschliche Wesen」の中の「Wesen」という単語に注目する。彼の見解を再現してみると以下ようになる。

Wesen という単語は、英語には同じ意味範囲を持ったものはないと断った上で、次のような複数の意味を含むと言う。

1) 本質 (essence) (なお、木村・相良「新訂 独和辞典」ではこの項は実在、本体、本質となっている。) : だが、本質を意味する場合もけっして、なにかある超現世的なもの、あるいはなにかある希薄にされ、純粋化されたものという意味に解されてはならず、ほとんどその反対に、あるものの「がっしりした核心」(solid core)、すなわちあるものの「本質的性質」(essential nature)あるいは「存在そのもの」(the very being) という意味に理解されなければならない。(下線は高取、以下同様)

2) ある存在 (a being) という意味のきわめて平凡なドイツ語。(なお、木村・相良「独和辞典」ではこの項は、あること、存在となっている。) たとえば、ein menschliches Wesen は英語の a human being (人間存在、人間) であり、das höchste Wesen は the Supreme Being (至高の存在、神) である。

3) 総括あるいは総体という意味。(なお、木村・相良「独和辞典」ではこの項は、《各部分が連関する一つのまとまった全体を表す》組織、部門、事項、制度となっている) たとえば、Zeitungs Wesen (新聞) (なお、木村・相良「独和辞典」では新聞業、ジャーナリズム)、Postwesen (郵便) (なお、木村・相良「独和辞典」では郵便事務・郵便事業・郵便制度)、Steuerwesen (租税) (なお、木村・相良「独和辞典」では税務、税制、租税制度) など。これらの言葉のもとに解されるのは、ただ、これらの事物が個別的にその直接性においてではなく複合体として、したがっておそらくまたさらにそれらの事物のさまざまな連関において取られるべきだというだ

けのことである。」

この最後の用法は、マルクスの「フォイエルバッハ・テーゼ 六」の das menschliche Wesen の用法とも、それほど違っていない。以上がミリガンの見解である。実に、言語分析を介した重厚な解釈になっているというべきだろう。この線に沿って、私なりに「フォイエルバッハ・テーゼ 六」の箇所を言い換えてみると次のようになる。

「人間というものは、あるいは人間の人間たるところは、一人ひとりが孤立して生活していることではない。今現在、生活している人間というものは、家族や友人や職場の同僚や、地域の人々、自分の国や外国の人々と相互に働きかけながら、さらに、そのときどきの政治や経済や国際関係の影響を受けながら、日々過ごしている。それが人間である。」

以上の点を、内田の説明を借りながらも一歩踏み込んでみよう。それは、Postwesen (郵便) (なお、木村・相良「独和辞典」では郵便事務・郵便事業・郵便制度) についての内田の説明 (郵便制度について述べている) の箇所である。

「郵便を配達する人だとか、仕分けする人とか、さまざまなものが有機的に組み合わさって総体 (ボディ) としての郵便制度を作っている。その郵便制度を前提として始めてハガキに書くということが意味を持つてくるんであって、そういうものがなければ、ハガキはただの紙です。ハガキそのものをいくら顕微鏡でみても、ハガキのハガキたるゆえんは解りませんね。紙がハガキになるのはそれが郵便制度の一環——郵便制度というボディの一つの部分——としてある限りです。かりに郵便ストでもつづいて郵便がまひすると、ポストはただの屑かごになりましょう。実際は郵便だって孤立的にあるんじゃない。たとえば鉄道がストップすると郵便もストップする。郵便とか鉄道とか新聞とかいったいろいろの Wesen (Body) が分かちがたくからみ合っって一つの Wesen (Body) になっている、それが人間の社会であります。(中略) だから、個々の人間をみても人間の人間たるゆえんは解らん。」

この内田の引用部分で興味深いのは、ハガキは郵便制度という集合体 (ボディ) に位置づけられなければハガキではなく、ただの紙であるという点である。これを人間に当てはめてみると、人間も社会的組織や集団や制度の中に位置づけないと人間にならない。ただの有機体である。いくら、顕微鏡で脳の中を覗いて脳の生理的過程を眺めてみても人間は解らない、ということになるのでしょうか。

この内田、およびミリガンの見解との関連で、ここで付け加えておきたいのは、古在由重^⑩の人間の意識を唯物論的にとらえるとはどういうことかという論点である。古在によれば、それは第一に、人間の意識の出現は自然史の全発展の結果であること。すなわち、宇宙の歴史、生物の歴史、社会の歴史の結果である。第二に、人間の意識の存続は人間の意識の基底にある物質的構造に依拠している。その際に、この物質的構造には二つあり、一つは自然的規定であり物理・化学・

生物・生理などの関わる部分である。特に、脳の属性としての意識として取り上げられる部分である。もう一つは社会的規定であり、物質的な社会的存在とか物質的な社会的関係という側面から、すなわち、人間とは社会的に組織された物質であるとしてとらえられる側面に依拠している部分である。この古在の見解は、先に紹介したルリヤの見解と共鳴するところがあるが、古在はおそらく生産活動を念頭に置いた経済的な土台について述べているので、コミュニケーションとのかかわりについてはほとんど考えていないように思われる。その点から言えば、内田・ミリガンの説はコミュニケーションの側面に注目していて、新ヴィゴツキー派のワーチとかコールなどの説とも接近してくるよう思われる。

このように、人間は社会的ネットワークの網の目の中に組み込まれてはじめて人間となるのである。しかし、逆に、その中では、個人の思惑だけで自由、勝手に動くことが困難であり、たえず他者の思惑によっても影響を受け続けるのである。われわれは人生のさまざまな場面において、自分の思いだけではいかんともしがたい局面にたびたび遭遇する。いやむしろ、思いとは別の方向へと流されてしまうことのほうがどちらかと言えば多いと言ったほうが適切だろう。人生がややもすれば希望通りに流れていかないのはこのような事情があるのである。

注

- ①北川達夫「学力が高い子が育つ『フィンランド式』の真実」『週刊東洋経済』2008年1月12日号、64-65。
- ② Brothers,L. Friday's footprint : how society shapes the human mind. Oxford University Press. 1997.
- ③ Chapman,M. The epistemic triangle : Operative and communicative components of cognitive competence. In M.Chandler & M.Chapman (Eds.)Criteria for competence. Lawrence Erlbaum Associates, 1991, 209-228.
- ④本稿に関する関連した説明は、高取憲一郎著『社会と心：新ヴィゴツキー派の視点』三学出版、2009年を参照されたい。
- ⑤Davydov,V.V.(2005) On the distinctiveness of A.R.Luria's research approach. In T.Akhutina, et al.(Eds.) A.R.Luria and contemporary psychology : festschrift celebrating the centennial of the birth of Luria. Nova Science Publishers. 2005, 49-54.
- ⑥Vocate,D.R.(1987) The theory of A.R.Luria : functions of spoken language in the development of higher mental processes. LEA.
- ⑦マルクス「フォイエルバッハに関するテーゼ」マルクス・エンゲルス『[新訳]ドイツ・イデオロギー』服部文男(監訳)所収、新日本出版社、1996年
- ⑧内田義彦『社会認識の歩み』岩波書店、1971年
- ⑨マルクス『経済学・哲学手稿』(国民文庫版)藤野涉(訳)大月書店、1963年
- ⑩古在由重「唯物論一般の原則(その史的解明)」『古在由重著作集 第1巻』所収、215-305、1965年

著者紹介(高取憲一郎)

著書:1『心理学のルネサンス:ヴィゴツキー理論の展開』(京都・法政出版、1987年)

ソビエト連邦(当時)の心理学者、ヴィゴツキーの心理学をわが国で初めて本格的に論じた著書。ヴィゴツキー心理学が、心の社会的形成をテーマとした画期的な心理学理論であることをアメリカやヨーロッパのヴィゴツキー研究の動向と照らし合わせながら明らかにした。

2『ヨーロッパ心理学との対話:ブダペストで考えたこと』(京都・法政出版、1990年)

1988年秋から1989年夏まで、ハンガリーの首都ブダペストのハンガリー科学アカデミー社会心理学研究所に日本学術振興会特定国派遣研究者として滞在したときの記録である。東欧、北欧、フランス、イタリアなどのヨーロッパ心理学の、わが国にはほとんど知られていない研究について発掘した貴重な著作である。

3『ヴィゴツキー・ピアジェと活動理論の展開』(京都・法政出版、1994年)

ヴィゴツキーとピアジェの、一見相対立するかに見える心理学理論を活動理論およびコミュニケーション論の視点から統合できる可能性を明らかにした。ここで紹介している、私の6つの著書の中では、もっとも大きな影響をわが国の心理学、哲学、教育学、言語学等の諸研究に及ぼした。

4『ピアジェ心理学の世界』(京都・法政出版、1995年)

わが国のピアジェ心理学研究の類書には見られない視点から、ピアジェ心理学の再検討を試みた意欲作である。特に、ピアジェの弟子、サンクレールの言語心理学に注目して、ピアジェ心理学の新たな可能性を切り開いた一書である。

5『文化と進化の心理学』(大津・三学出版、2000年)

ヴィゴツキーとピアジェの心理学を、新ヴィゴツキー派の文化心理学、およびイギリス・アメリカを中心に大きく発展しつつある進化心理学の視点から、新たな検討を加えた書である。適切な参考文献を付しつつ、わかりやすくヴィゴツキー派心理学およびピアジェ派心理学を論じた書として評価が高い。

6『社会と心:新ヴィゴツキー派の視点』(大津・三学出版、2009年)

鳥取大学で30年余実施してきた心理学講義を基にして、社会が脳を経由して心を形成するメカニズムを論じた。新聞、週刊誌、月刊誌、テレビ番組等のマスメディア媒体も利用しながらアクチュアルな問題意識で挑戦的に論じている。いわば、研究活動の集大成の書物である。